

## GTO TRIO ジー・ティー・オー・トリオ

## 濃密なまでの楽曲アンサンブルと他に類を見ないパフォーマンスに溢れたステージ

3月16日 渋谷・ボディ&amp;ソウル

取材：石沢功治

写真提供：ボディ&amp;ソウル

## SET LIST

①ザ・サン・イズ・シャイニング ②  
メレンゲ・メディテッラーネオ ③ワ  
ン・フォー・G ④アプトウルズ・マ  
ーケット ⑤ジャン્યアリー  
(Part1 & Part2) ⑥スノー ⑦  
カチ ⑧ダンス ⑨カイツ ⑩ノー  
ヴァウルズ・アラウド  
encore. ア・マン・ウィズイン・  
ヒムセルフ

## MEMBER

ガディ・レハヴィ(p)、タル・マシアハ  
(b.g)、オフリ・ネヘミア(ds)



ピアノのガディ・レハヴィ、アコースティック・ベースのタル・マシアハ、ドラムのオフリ・ネヘミアから成るイスラエル出身の俊英3人によるGTOトリオが3月に来日ツアーを行なった。同トリオで日本の土を踏むのは3度目。今回は3月9日の新宿ピットイン公演から、再び新宿ピットインに戻った最終日17日まで9日間にわたって連夜演奏が繰り広げられた。満員御礼となった最終日前夜の渋谷「ボディ&ソウル」では圧倒的なトリオ・パフォーマンスを展開。その熱いステージの模様をお伝えしよう。

## あまりの凄まじさに場内からどよめきが起きたオフリのドラム・ソロ

GTOトリオの初来日はファースト作『From the Road』を引っ提げての2018年で、続いて2022年6月に再来日している。ただし、この時は東京の武蔵野市民文化会館の1公演のみだったので、ツアーで回るのはこれが実質2度目である。ボディ&ソウル公演の時点でガディは27歳。現在はニューヨークのブルックリンを拠点にラヴィ・コルトレーン(sax)・グループのレギュラー・ピアニストとしても活躍している。タルとオフリはともに30歳。タルも現在はブルックリンを拠点にクラリネット奏者アナット・コーエンのグループなどにも在籍。また、もともと10歳の時に

最初クラシック・ギターを始めていて、2022年には全編でナイロン弦アコースティック・ギターをプレイした初リーダー作『Tiyul』をリリースしている。オフリは昨年3月に自身のトリオを率いて(ギターのニツァン・パールとピアノのトメル・パパール)来日ツアーを行なっていて、その模様は本誌2023年5月号にてライブ・リポートを掲載したのでご記憶の方もいらっしゃるだろう。現在はテルアビブに住んでいるが、間もなく、2015年から拠点を構えていたニューヨークに戻るとのこと。現在はシャイ・マエストロ(p)のトリオでもドラムを叩いている。

ツアーも終盤となったボディ&ソウル公演は、ホール後方に臨時席が設けられるほど満員盛況の中、ファースト作『From the Roa

d』からタルのオリジナル「ザ・サン・イズ・シャイニング」で始まった。総じてスウィングな楽曲だが、キメのリフの上で短いドラム・ソロが挿まれたり、テンポがばらけてルパートでのエンディングになったりバラエティに富んだ構成が実に素晴らしい。

2曲目は前述したタルのファースト作『Tiyul』から自身が書き下ろした「メレンゲ・メディテッラーネオ」。クラシカルなピアノのイントロなど、同曲もさまざまな楽想が顔を覗かせる。特にテーマでピアノの旋律にタルのベースがセカンド・ラインで絡んでくる場面は、チック・コリア(p)のアルバム『スリー・カルテッツ』(1981年)あたりのエディ・ゴメス(b)を想起させて思わずゾクゾクしてしまった。また、オフリのドラム・ソロが早くも飛





ガディ・レハヴィ(p)



タル・マシアハ(b.e)



オフリ・ネヘミア(ds)



タル・マシアハはベースだけでなくアコースティック・ギターも披露(撮影:石沢功治)

び出し、あまりの凄まじさに場内からどよめきが起こる。なお、GTOトリオは待望のセカンド・アルバムを今年10月頃にリリース予定で、同曲が収録されるとのこと。

3曲目はオフリのナンバー「ワン・フォー・G」で、こちらはミディアム・テンポの3拍子。ガディの両手からメロディアスなテーマとソロが情感たっぷりに奏でられる。さらに素晴らしかったのがタルのベース・ソロだ。速いパッセージなどは一切封印し、彼もまたどこまでもメロディアスなフレージングを追究。しかも、途中でちょっとした間があったのだが、おそらく音の選択を吟味するあまり、良い旋律が浮かんでくるまでじっくりと待っていた。手癖フレーズで埋めるなんて一切お断りと言わんばかりのアプローチに思わずぐっと来てしまった。

4曲目「アプトゥルズ・マーケット」もオフリのオリジナルで、再びオフリの超絶ドラム・ソロが繰り出され、場内は固唾を呑んで見入っていた。また、ガディの起伏に富んだピアノ・ソロも秀逸で、途中でジョン・コルトレーン(ts,ss)の「至上の愛」のテーマ断片も盛り込まれる場面もあり、思わずにやりしてしまう。

1部最後はファースト作『From the Road』に収録されていたガディのオリジナル「ジャンユアリー」のパート1とパート2をメドレーでプレイ。ピアノが深遠な響きを紡ぎ出す序盤、それに対してアップ・テンポになってダイナミックに盛り上がっていく後半と、両者

のコントラストが見事だった。

### 拍手喝采の嵐となった 「ノー・ヴァウアルズ・アラウド」

休憩を挿入での2部は、タルがベースからアコースティック・ギターに持ち替えて、『Tiyul』に収録されていた「スノー」を披露。美しい旋律がガディのピアノと絡み合い、そこにオフリが絶妙なドラミングで彩りを添えていく。ちなみに、ギターはオフィス・ズー招聘の東京近郊の公演でいつもスタッフを務めている江口陽亮(g)が所有するブルガリアのメーカーのオルフェウス・バレー(Orpheus Valley)である。

「スノー」と同様にギターのみによるイントロで始まった「カチ」も『Tiyul』からのタルのオリジナルで、こちらは5拍子。タルは途中からウッド・ベースに戻るとソロも披露。ちなみに、曲名はアルゼンチン北部サルタ州の村の名前とのことで、ガディのピアノ・ソロが哀愁に満ちていたのも納得であった。

「ダンス」はファースト作『From the Road』からで、ガディが無邪気な子供たちが踊っている様子からインスピレーションを受けて作った曲。確かにリズムカルな曲がゆえに、自然に体が軽快なテンポに揺らされる。オフリの叩き出すグルーブとタルが弾く低音リフがこれまた鮮烈で、その上でめくるめくハーモニーとフレーズをガディが繰り出すと、場内は異様な熱気に包まれていく。

その熱気をクールダウンするかのような美

しいワルツの「カイツ」は『Tiyul』に収録のタルの曲。が、曲後半のピアノ・ソロでは倍テンポになったりと、しっかり盛り上がる展開も待ち受ける。

そして、本編最後はGTOトリオのノックアウト・チューンとも言えるガディのオリジナル曲で「ノー・ヴァウアルズ・アラウド」だ。彼らに言わせると12小節のFのブルースなのだが、これがとんでもない代物。まずいきなり前半4小節はドミナントC7で始まり、5小節目でトニックF7へ。6小節目がサブ・ドミナントBb7、7小節目がF7、8小節目がIII m7=Am7、そして最後の4小節はVI7=D7が1小節でII m7=Gm7が3小節、どこがブルースだ(笑)。しかもこれを超アップ・テンポで展開していくのだからたまたまのものではない。畳み掛けるようなピアノ・ソロ、そして最後は唾然とするドラム・ソロで会場は拍手喝采の嵐となっていた。同曲もGTOトリオの次のアルバムに収録される予定とのこと。

万雷の拍手に迎えてられてのアンコール曲は、一転してイスラエルの有名なシンガー&作曲家シャローム・ハノフの「ア・マン・ウィズイン・ヒムセルフ」を披露。観客にハミングで歌わせる粋な趣向でステージは幕を閉じた。

3人がこれまで積み上げてきた濃密なまでの楽曲アンサンブルとパフォーマンスは他に類を見ないとと言っても過言ではないほど。その魅力を存分に堪能できたステージであった。